

グローステストの光概念に関する諸問題 Ⅲ

翻 訳 Robert Grosseteste: *De colore*

高 岡 尚

1. この翻訳の底本には、BAUR の校訂版、Die philosophischen Werke des Robert Grosseteste, (Beiträge zur Geschichte der Philosophie des Mittelalters, IX, Münster, i.W.; Aschendorff, 1912) XII, De colore, p. 78:4~p. 79:26 を使用した。
2. 訳文中の | 印は、この版の頁の「かわりめ」を示す。
3. 訳文中の () 内の細字は訳者が補ったものである。
4. 訳文中の I II III……, (1)(2)(3)……の番号, および (イ)(ロ)……の記号は、読解を容易にするために訳者が挿入した。
5. 訳文中、文頭の [] 内の細字は、論旨を明らかにするために各項ごとに訳者が補ったものである。
6. 特に注目を要する言葉を示すために、あるいは、或る言葉のグループを明確にするために「 」を用いた。
7. 書名を示すためには『 』を用いた。
8. 引用された語句や文章を示すためには〈 〉を用いた。
9. 訳文中文字右上の 1.2. の番号は注の参照番号である。
10. 訳文の右欄外の [78] [79] は、BAUR 版の頁数である。

訳 ロバート・グローステスト『色について』

[78]

I [色を構成する要素として] 色は「透明体によって物体化された光」lux incorporata perspicuo である。——さて、透明体 perspicuum の種類は二つである。すなわち、透明体は、あるいは(1)土性から分離されているがゆえに純粋であり purum separatum a terrestreitate, あるいは(2)土性が混合しているために不純である impurum terrestreitatis admixtione。——しかるに、光 lux は四つに分類される。なぜなら、光 lux は(1)明るい暗い clara vel obscura, または(2)少ないか多いか pauca vel multa であるからである。私は、「多い光」lux multa とは「大きな基体によって拡散せしめられた光」と言っているのではない。むしろ、湾曲した鏡が太陽に向けて置かれ鏡の全表面に落ちる光が鏡の球面の中心へと反射するとき、多くの光が一点に集められるのである。この中心に集められたあの光の力によっても可燃性のものはすぐに燃え出す。

II [色の生成について] それゆえ、(基体の大小にかかわらず) 純粋な透明体における明るくて多い光が白色であり lux clara multa in perspicuo puro albedo est, 純粋でない透明体における少ない光が黒色である lux pauca in perspicuo impuro nigredo est。この学説においては、「黒は欠如 privatio であり、白は所有態 habitus あるいは形相 forma である」と主張しているアリストテレス² とアヴェロエスの学説が説き明かされているのである。

この学説から、また、白に隣接する色——つまり、白からの衰弱および変化 recessus ab albedine et permutatio として生成しうる色——は七つあってそれより多くも少なくもないという

ことが帰結される。

同様に、黒に隣接する色——つまり、黒から白への上昇として現われ、「白からの下降として現れる他の七つの色」と合流することになる色——も七つあることになろう。

Ⅲ〔白からの下降における〕すなわち、白の本質を構成するものは次の三つである、すなわち、「光の多さ」、「光の明るさ」および「透明体の純粋性」*lucis multitudo, eiusdemque claritas et perspicui puritas* である。それゆえ(1)〔構成要素の〕二つがそのまま留まり、三つの中のどれか一つの衰弱 *remissio* が起こることが可能である、|この仕方によれば三つの色が生成することにな^[79]らう。(2)あるいは、三つの中のどれか一つだけが留まり、残り二つの衰弱が起こりうるであろう、このようにして、先きの三つとは別な色どもが三つ生成することになろう。(3)あるいは、三つすべての衰弱 *remissio* が同時に起こりうるであろう。このようにして(1),(2),(3)の〔在り方において〕、宇宙においては、白から七つの色が直接に発出することになろう。

Ⅳ〔黒からの上昇における〕黒に隣接する七つの色を介して黒から白へと向かう上昇が証示されるさいの論拠も(七つの色が)類似している。それゆえ、宇宙には十六の色が存在することになろう。すなわち、(1)両端の二つの色(黒と)、および(2)両端から別の両端につながる七つの色——すなわち、(イ)こちらからは(黒は)増強 *intensio* によって上昇し、(ロ)あちらからは(白は)衰弱 *remissio* によって下降し、真ん中においては同じになって合流する(七つの色——)が存在することになろう。

Ⅴ〔生成した十六のおのおの色における衰弱と増強の諸段階をもたらす色の相違について〕しかるに、(黒と)中間の色のどれにおいても、増強と衰弱の段階は無限に存在する。それゆえ、強められるものども——すなわち、「光の多さ」*multitudo luminis* と「光の明るさ」*claritas luminis*、および、「透明体の純粋性」*puritas perspectivi*、さらにこれらに対立するものども(「少なさ」「暗さ」)——の列挙と組み合わせによって生じる九つの色は、増強と衰弱の諸段階を列挙することによって無限になるであろう。

Ⅵ〔ひす〕さて、色の本質 *essentia* と色の多さ *multitudo* が上述の仕方で存在していることは、自然学と透明体学 *Perspectiva* の諸原理をかなり深くかなり奥まで知っている人びとには、理性によってばかりではなく実験によっても明らかである。というのは、彼らは純粋なものであれ純粋でないものであれ透明体を形づくることを知っているので、(1)透明体において明るい光を受け入れたり、(2)あるいはもしのぞむならば暗い光を受け入れたり、(3)形づくられた形態 *figura formata* を介して透明体自体の中に少量の光 *lumen* をつくったり、(4)形づくられた形態を任意に多重化したりするからである。このように彼らは、技術によって、彼らがのぞむ色のすべての様態を視覚的に示すことができるのである。

リンコルン(の^可)による色についての論文が終わる。(完)

注

1 「色は透明体によって物体化された光である。」

これは、グローステストにおける色の生成の普遍的な原理である。『色について』は、この普遍的な原理に基づいて、さらに各色の発生の仕組みをも原理化しようとする試みである。以下に、グローステストが他所において述べたこの普遍的な原理の具体的な適用例を四個所参照する。

i 旧約聖書創世記第一章の「創造の六日間」物語の解釈という仕方では、グローステストは物体世界の生成を説明する。その解釈によると、「創造のさいしょの三日間」において、まだ「光体」(光)が造られるより先に造られた「地を中心とする十三個の同心球」(中世宇宙觀の^{十三}個の天球)において、すでに色が生成している。

物体的世界の創造のさいしょに、すべての物体に先きがけて造られた実体である光 *lux* が、

ともに実体である質料とともに、一点からあらゆる方向へ等しく拡散し、宇宙の広さ（十三個の天の球形の広がり）を造る。光 lux はこの広がりいちばん外側の球面に殻 firmamentum を形成すると、その所で光芒 lumen に変わり、その殻の内側のあらゆる部分から球の中心へと、球いっばいに広げられた量を押し戻しながら帰ってゆく。この帰りの過程において光芒 lumen は、外側から順番に中心の「地の球」まで、十三個の天球を形成する。さいしょの九個の天球においては、量を中心へと押し戻す光芒 lumen の力が完全なため、そこには量はいっさい含まれておらず純粋な光芒 lumen 以外のものは存在しない。それゆえ、そこには色も存在しない。しかし、十個目以後の球の形成のさい、外から中心へと圧縮されてきた量の濃度はいっそう増すことになり、また中心へと量を圧縮する光芒 lumen の強度は弱められている。それゆえ第十番目の球においては、光芒が量を完全に押し出すことができず、そこに光芒と量の合成体すなわち「火」が生成する。「火」はいわば「不完全な光芒」である。このようにして、十一個目以後の諸球の形成は、十個目の球において完全に光芒になりきれなかった光芒すなわち火の「中心への移動」によってすすめられた。それゆえ、「形成されてゆく各球ごとにいっそう濃度が増す量」と「形成されてゆく各球ごとにいっそう量化してゆく火のいっそう不完全さを増す圧縮作用」によって、第十個目「火」、第十一個目「空気」、第十二個目「水」、第十三个目「土」の諸球が生成した。しかるに「火」「空気」「水」「土」の球はすべて、この生成の順序にしたがって次第に弱められているという仕方「火」を所有する。そして、「火」は「自らの内に量を含みもつ不完全な光芒」である。それゆえ、四元素はすべて、なんらかの程度において光芒を有することになる（「火を介して光芒が元素すべてに内在する」。このことがそのまゝの形で明らかに述べられた文章を訳者はまだ見えない。しかし、「光について」における「第一物体の本質である光芒がより低位の物体すべての根である」という考え方から、このことは明らかである）。それゆえ、「火」「空気」「水」「土」それぞれにおいてそれぞれに違う程度の「光の物体化」が実現する。こうして、光体ども（星體）が造られるより先きに、創造の三日目において、四元素の天球は、すでに、色を有しているのである。

《或る人びとが「物体性」corporeitas と呼んでいるところの「物体的な第一形相」forma corporalis は「光」lux である、と私は思う。（中略）第一質料の中に創造された第一形相である光 lux は、(1) 自分自身を自分自身であらゆる場所へと無限回多重化しながら、また、(2) 質料すべての部分へと均等に押し広げながら、(3) 置き去りにすることができない（第）質料を自分と共に離散させながら、それを「世界という機械」mundi machina が存在しうるだけの量にまで、時の始めにおいて広げたのである。》 Formam primam corporalem, quam quidam corporeitatem vocant, lucem esse arbitror. Lux ergo, quae est prima forma in materia prima creata, seipsam per seipsam undique infinities multiplicans et in omnem partem aequaliter porrigenens, materiam, quam relinquere non potuit, secum distrahens in tantam molem, quanta est mundi machina, in principio temporis extendebat. (Robert Grosseteste, *De luce seu de inchoatione formarum*, ed. Baur, Die philosophischen Werke Grossetestes, BGPM Bd. IX Münster i, W., 1912, p. 51: 10~11, 52: 17~21, 拙訳『光について、すなわち、諸形相の始めについて』札幌大学女子短期大学「紀要」第4号, 1984, 69頁, 70頁)

《光 lux は、自らを無限に多重化することによってあらゆる部分へと等しくなるがゆえに、(第) 質料をあらゆる場所に等しく球形に広げる。そして、その広がり必然性から、(第) 質料の最も外の部分は中心に近い最も内の部分よりもより多く広がりより多く希薄になる、ということが帰結される。また、最も外側の諸部分が最高度に希薄になったとき、内側の諸部分はまだより大きな希薄化を受け入れうるであろう。

それゆえ、光 lux は、前述の仕方によって第一質料を球形に広げるとともに、最も外の諸

部分を最高度に希薄化しながら、最も外の球において^(*)質料の可能性を完全に補完した。そして、^(*)質料がそれ以上に押し広げられることを受け入れる可能性を残さなかった。このようにして第一物体が球の最外部において完成されたのである。この「第一物体」は「堅い殻」firmamentumと言われ、自らを構成するために第一質料と第一形相だけしか所有していない。》Rediens igitur ad sermonem meum dico, quod lux multiplicatione sui infinita in omnem partem aequaliter facta materiam undique aequaliter in formam sphaericam extendit, consequiturque de necessitate huius extensionis partes extremas materiae plus extendi et magis rarefieri, quam partes intimas centro propinquas. Et cum partes extremae fuerint ad summum rarefactae, partes inferiores adhuc erunt maioris rarefactionis susceptibiles.

Lux ergo praedicto modo materiam primam in formam sphaericam extendens et extremas partes ad summum rarefaciens, in extrema sphaera complevit possibilitatem materiae, nec relinquit eam susceptibilem ulterioris impressionis. Et sic perfectum est corpus primum in extremitate sphaerae, quod dicitur firmamentum, nihil habens in sui compositione nisi materiam primam et formam primam. (ibid., p. 54: 11~24, 同訳71~72頁)

《このような仕方では「堅い殻」firmamentumという「第一物体」が完成されたのであるから、それ^(第二物体)は、自らの光 lumen を自らのあらゆる部分から全体 totum の中心へと広げる。なぜなら、光 lux は「第一物体」の完全性であり、自然本性的に自分自身を第一物体から多重化するがゆえに、必然的に光 lux は、全体の中心へと注ぎこまれるからである。この光 lux は、自らを第一物体から注ぎ出すとき、^(*)質料から分離しえない全的な形相であるから、自分と一緒に第一物体の「質料の気息性」spiritualitas materiaeを広げる。このようにして「気息的な物体」corpus spiritualeあるいは、むしろあなたが「物的な氣息」spiritus corporalis と言いたいものである光 lumen が第一物体から進み出る。(中略)

それゆえ、光 lumen 自体は、第一物体から中心へと伸びて集まるとき、第一物体の下位に存在する量的なもの moles を集めた。そして、第一物体は、すでに完成されたものであり不可変的なものである限りもはや減じられることが出来なかったがゆえに、また、場所は空虚になりえなかったがゆえに、必然的に、^(量的な)集合する過程において量的なものの最も外側の諸部分が広げられ分離せしめられた^(第二の球)。このようにして、上述の量的なものの最も内側の諸部分においてはより大きな濃密性 densitas が生じ、また、最も外側の諸部分においては希薄性が増大した。また、^(量論的な)集める光の力 potentia luminis および、集めるときに分離させる光の力は、第一物体の下位に包含されている量的なもののあの最も外側の諸部分を最高度に希薄化する程に大きかった。こうして、上述の量的なものの最も外側の諸部分において、「第二の球」が生成した。(中略)

さて、「第一物体から生み出された光 lumen」が第二の球の内側に更に濃密な量を残したのと同様に、「第二の球から生み出された光 lumen」は第三の球を完成し、第三の球の内側に集合化によってなおいっそう濃密化される量を残す。そして、この順序にしたがって分離する集合化が進み出て、九個の天球が完成され、四元素の質料であるところの濃密化された量が最下位の第九の球の内側に集合化されるに至ったのである。

しかるに、「月の球」である「最下の球」は、自分自身からも光 lumen を生み出し、自らの光 lumen によって(1)自らの下位に含まれている量を集め、(2)集めることによってあの量の最も外側の諸部分を微細化し分離させた。しかし、この光^(月の) lumen の能力は、あの量^(月の球の下位に含まれている量)の最も外側の諸部分を集めることによって最高度に分離させるのに十分ではな

かった。それゆえ、この量（月の球の下位に含まれている量）のすべての部分において不完全性および「集合作用と分離作用を受け入れる可能性」が残留した。そして(1)この量の最上の部分は、最高度に分離されなかったが、しかし分離によって「火」となり、なおも諸元素（彙）の質料であり続けた。この元素（彙）は、自分自身から光 lumen を生み出しながら、自らの下位に包含されている量を（空の中心）集めながら、その最も外側の部分を分離させたが、しかし火そのものの分離は（星の下位に量）よりも少量であった。この元素（彙）はこのようにして火を造り出した。ところで、(2)火は、自分自身から光 lumen を生み出して、（空）下位に包含されている量を集めながら、その量の最も外側の諸部分（彙）を分離したけれども、その量の分離は（空の下位に量）よりも少量であった。このようにして火は空気を造り出した。(3)空気も、自分自身から「気息的な物体もしくは物體的な氣息」を生み出して自分の内側に包含されているものを集め、集めることによってその外部のものどもを分離しながら水と土を造り出した。……» Hoc itaque modo completo corpore primo, quod est firmamentum, ipsum expandit lumen suum ab omni parte sua in centrum totius. Cum enim sit lux perfectio primi corporis, quae naturaliter se ipsam multiplicat a corpore primo, de necessitate diffunditur lux in centrum totius. Quae cum sit forma tota non separabilis a materia in sui diffusionem a corpore primo, secum extendit spiritualitatem materiae corporis primi. Et sic procedit a corpore lumen, quod est corpus spirituale, sive mavis dicere spiritus corporalis. Ipsum ergo lumen a corpore primo in centrum expansum et collectum molem existentem infra corpus primum congregavit; et cum iam non potuit minorari corpus primum, utpote completum et invariable, nec potuit locus fieri vacuus, necesse fuit, ipsa in congregatione partes extimas molis extendi et disgregari. Et sic proveniebat in intimis partibus dictae molis maior densitas, et in extimis augmentabatur raritas; fuitque potentia tanta luminis congregantis et ipsa in congregatione segregantis, ut ipsas partes extimas molis contentae infra corpus primum ad summum subtiliarent et rarefacerent. Et ita fiebat in ipsis partibus extimis dictae molis sphaera secunda. Sicut autem lumen genitum a corpore primo complevit sphaeram secundam et intra secundam sphaeram molem densiorem reliquit, sic lumen genitum ex sphaera secunda sphaeram tertiam perficit et infra ipsam sphaeram tertiam molem adhuc densiorem congregatione reliquit. Atque ad hunc ordinem processit ipsa congregatio disgregans, donec complerentur novem sphaerae caelestes et congregaretur inter sphaeram nonam infimam moles densata, quae esset quattuor elementorum materia. Sphaera autem infima, quae est sphaera lunae, ex se etiam lumen gignens, lumine suo et molem infra se contentam congregavit et congregando partes eius extimas subtiliavit et disgregavit. Non tamen fuit huius luminis potentia tanta, ut congregando partes eius extimas disgregaret ad summum. Propterea remansit in omni parte molis huius imperfectio et possibilitas receptionis congregationis et disgregationis. Et pars suprema molis huius disgregata non ad summum, sua tamen disgregatione ignis effecta, remansit adhuc materia elementorum. Et hoc elementum ex se lumen gignens et molem infra se contentam congregans eius partes extimas disgregavit, minori tamen ipsius ignis disgregatione; et sic produxit ignem. — Ignis vero ex se lumen gignens et molem infra se contentam congregans eius partes extimas disgregavit, minori tamen ipsius disgregatione; et sic aërem produxit. — Aër quoque ex se corpus spirituale vel spiritum corporalem generans et intra

se contentum congregans et congregando exteriora eius disgregans aquam produxit et terram. (ibid., p. 54:31~p. 55:1~3, p. 55:8~p. 56:11, 同訳72頁)

《それゆえ、「創造された光」lux conditaによって、第一義としては最初の三日間を時間的に完成させた可視的な光lux visibilisが理解される。》Per lucem igitur conditam intelligitur primo sensu lux visibilis primos tres dies temporaliter peragens; (R. Grosseteste *Hexaëmeron* Particula 2, VIII 2, ed. Richard C. Dales and Servus Gieben O.F.M. Cap., Oxf. U.P. London 1982, p. 96)

《また、アウグスティヌスが述べているように、光luxは物体化することによってもろもろの色を造り出し、表面にそそぎかかることによってそれらを運動させる限りにおいて、もろもろの色の女王である。湿気の透明体の中で物体化した光が色だからである。》Est quoque lux, ut dicit Augustinus, colorum regina, utpote eorumdem per incorporacionem effectiva et per superfusionem motiva. Lux namque incorporata in perspicuo humido color est. (ibid., Particula 2, X, 2, p. 99)

《何びとといえども、「色は透明体における光であり、そして(創造の最初の三日間)光がまだ創造されてはいなかったのであるから、地が始め(創造の最初)において色づけられたということは、ありえぬことであった」と考えることは出来ない。その理由は以下の通りである。もし(創造の最初の三日間に造られた十三個の天球に)モノどもの(性質)制約が連続的であったのであれば、(異質があるようにしても)火はこの固い地に混じっていた。そのため、「地の湿気」において、この(完全な在り方において)地の湿気に混じった)光が物体化して地を色づけられたものとしたのである。それは、ここにわれわれのもとにわれわれが感覚しているこれら元素ども(火、空気)は純粹ではなく、それぞれ(火、空気)の元素にそれぞれ(火、空気)の元素が混ぜ合わされ、(混ぜ合わされた)支配的なものどもによって(空気、水、土と)名付けられる(それゆえ、すべての元素どもにはみな火が混じっており、その結果)からである。(それゆえ、創造の最初の三日間、太陽の光が創)》Nec putet aliquis terram non potuisse a principio fuisse coloratam, ideo quia color est lux in perspicuo et nondum erat lux creata; quia si erat condicio rerum successiva, erat ignis huic terre calcabili a principio conmixtus, sicut et nunc est, cuius lucis incorporacio in humore terrestri reddebat terram coloratam. Non enim hec elementa que hic apud nos sentimus sunt pura, sed singulis singula permixta et a predominantibus denominata. (ibid., Particula 4, VII, 2, p. 129)

なお、グローステストが十三個の天球の広がりをも「透明体」とみなしていたことは、本訳『色について』冒頭における「透明体の種類」についての説明および当注 *Hexaëmeron, De luce* の上掲部分の流れから容易に推察しうると考えられる。しかし、筆者はそれを文章に表現された主張として確認していない。なお、透明体についてここにアリストテレスを参照する。

《ところでわれわれが透明と呼ぶところのものは空気にも水にも、またその他の透明と呼ばれているところの物体のうちのどれにも固有なものではなく、むしろ何か共通な本性であり能力である。これはこれらのものから離れて在るのではなく、むしろこれらのものに内在するものである。のみならずまたその他の物体にも内属しているものであるが、前者〔空気や水〕にはより多く後者〔その他の物体〕にはより少なく内在している。》(Aristoteles, 『自然学小論集』, 感覚と感覚されるものについて 第三章 439a 20, 副島民雄訳 岩波書店『ア

リストテレス全集』第六巻，一九六八年発行，一九一頁。）

《ところで何か透明なものがある。しかし「透明なもの」と私が呼ぶのは、見られるものではあるが、しかし簡単に言えば、「自体的に見られるもの」ではなくて、むしろ自分とは別のものに属する色を通じて見られるものことである。そして空気や水や固体の多くのものがこのような性質のものである。〔何か透明なものがあると言うのは〕何故かというに、それらが透明であるのは水である限りででもなく、また空気である限りででもなく、この両者のうちには同一の或る本性が内在している——これはまた永遠な上方の物体のうちにもあるが——からなのである。》（同上『靈魂論』第七章 418b, 上掲書, 六一頁。）

ii 「創造の業」の四日目に光体が造られる。先だつ三日間において十三天球と元素における色との原因であった光芒 *lumen* は、これら光体にゆだねられる。こうして、太陽によってすべての可視的なものどもの形相、形象、色が生成することになる。

《アウグスティヌスが述べているように、これ（ 光_{lux} ）は自らの光線 *radii* を世界のもろもろの光体から大地にまでとどけるけれども、しかし、これ（ 光_{lux} ）の光線 *radii* は、それぞれの汚れた光体を介して拡散されるけれども、汚されてはいない。》 *Hec, ut dicit Augustinus, cum de mundi luminaribus radios suos terras usque pertendat, tamen eius radii per queque immunda diffusi non contaminantur.* (R. Grosseteste, *ibid.*, Particula 2, X, 4, p. 100)

《太陽は宇宙における人間の眼であると言われ、自分のうちに「物体的で視的な力」(體) および「物体的で視られうる力」(物体どもの形) の根(光)を有している。(中略)

しかし、「太陽が神の視に基づいて存在する」という言い方は、また別の仕方によっても理解される。その理由は次の通りである。多分、それ(光)の光は視覚にすべての色どもの形象を示す光の第一のものである。そして、色は物体化された(太陽)光であり、その(物体化されて)光は物体化されたために(太陽)光が注ぎかけられる以外に視覚へと運ばれることがない。それゆえ、「色が可視的な光と同一の本性を共有していること」は明らかである。それゆえ、「われわれの眼に可視的な光」の根が太陽に在ることになれば、色はすべて自分の実体の中に太陽の光からくる(太陽)有することになる。であるから、光は(太陽)注ぎかけられて自分を色に合一し、(その結果)色を現実態において(お視われ)見られうるものにするのである。したがって、見られうるものが何であれ(現実態)見られうるものとなる(現実に見)のは(太陽)光を介してである、ということになる。じっさい、一つの宇宙一つの世界においては可視的な光はすべて一つの根に帰着されるべきである。そして、その一つの根はおそらく、太陽以外においては見いだされえないのである。(以上、「太陽が神の視に基づいて存在する」と) (この言い方が、別の仕方によって理解される理由)

それゆえ、「太陽は自分の光の力を介してすべての可視的なもの(體)に内在する。それゆえ、太陽は(體)視に基づいて存在する」。(中略)

続いて《*vas admirabile*》について。この語句は、『ヨハネによる福音書』《初めに言があった。》の個所についてのヨハンネス・クリゾストムス(の解)に従って解説されなくてはならない。そこで彼(クリゾストムス)は「太陽は、この可視的な世界の形相と形象と色のすべてを原因として自分の中に所有している。」と述べている。》 *Cum enim dicatur humanus oculus mundi et habeat in se virtutis corporalis visivae et visibilis radicem,*

Aliter autem intelligitur sol esse in conspectu Dei, [fol. 91^c] quia forte lux eius est lux prima visibilis manifestans visui species omnium colorum; et cum color sit lux in-

corporata, quae propter incorporationem non movet se ad visum nisi cum lux superfunditur, manifestum est quod color connativus est luci visibili. Si igitur lucis visibilis oculis nostris radix est in sole, omnis color habet in sui substantia de luce solari, cui lux superfusa se unit ut faciat colorem actu visibilem, et ita quidquid est conspectibile per naturam lucis conspectibile erit. Oportet enim omnem lucem visibilem in una universitate et in uno mundo ad unam reduci radicem, quae radix una nusquam probabilius invenitur quam in sole. Ideo igitur est sol in aspectu, quia in omni conspectibili est per virtutem sui luminis.

Quod sequitur: *vas admirabile*, exponendum est secundum Johannem Chrysostomum super illud Johannis, in principio erat verbum, ubi dicit quod sol causaliter continet in se omnes formas et species et colores huius mundi visibilis. (Robert Grosseteste *De operationibus solis* 5, 6, 11. ed. J. McEvoy, *The Sun as res and signum: Grosseteste's Commentary on Ecclesiasticus ch. 43*, vv. 1-5. *Recherches de Théologie Ancienne et Médiévale* 41 (1974))

iii グローステストは、太陽光によって生成する色の一つに「虹」を挙げる。グローステストは太陽光の屈折によって虹を説明した最初の人であるが、色の多様性の原因としては「湿気の透明体の純粋さの度合い」と「光の多少の度合い」の組合わせを挙げている。

《色は透明体に混じり合った光であるが、透明体は一方「純粋性」と「不純粋性」によって分類され、また、一方光は「明るさ」と「暗さ」そしてあるいは「多さ」と「少なさ」によって分類される。その結果として、これら六個の差異ども（純粋性、不純粋性、明るさ、暗さ、多さ、少なさ）のもろもろの組合わせによって、すべての色どもの生成と区別が存在する。しかしながら、一で同一な虹のもろもろの部分における色の多様性は、最も多くの場合太陽の光線の多量性と少量性によって現われる。すなわち、光線の多重化がより大である場所にはより明るく光輝に満ちた色が現われる。しかし、光線の多重化がより小である場所においては董色と暗黒色により近い色が現われる。(中略)しかし、一つの虹が他の虹に対して有する色の相違は、あるいは(๕) 受容する透明体の純粋性と不純粋性に起因して、あるいは(๕) 自らを押しつける光の明るさと暗さとに起因して現われる。すなわち、もし透明体が純粋で光が明るければ、その(๕) 色は白と光によりいっそう類似したものになるだろう。しかし、もし、日昇と日没の頃に起るように、(๕) 受容する透明体が煙成分の多い蒸気の混じったものであり光の明るさが少ない場合には、(๕) 輝きはいっそう少なくいっそう暗いものとなるはずである。》 Cum autem color sit lumen admixtum cum diaphano, diaphanum vero diversificetur secundum puritatem et impuritatem, lumen autem quadrifarie dividatur, secundum claritatem scilicet et obscuritatem et tunc secundum multitudinem et paucitatem, et secundum harum sex differentiarum connumeraciones sint omnium colorum generationes et diversitates, varietas coloris in diversis partibus unius et eiusdem iridis maxime accidit propter multitudinem et paucitatem radiorum solis. Ubi enim est maior radiorum multiplicatio, apparet color magis clarus et luminosus; ubi vero minor est radiorum multiplicatio, apparet color magis attinens hyazintino et obscuro.

Diversitas vero unius iridis ad aliam in coloribus suis tum accidit ex puritate et impuritate diaphani recipientis, tum ex claritate et obscuritate luminis imprimentis. Si enim fuerit diaphanum purum et lumen clarum, erit color eius plus assimilatus albedini

et luci. Si vero fuerit diaphanum recipiens habens permixtionem vaporum fumosorum et claritas luminis fuerit pauca, sicut accidit prope ortum et occasum, erit color minoris splendoris et magis obfuscatus. (Robert Grosseteste *De iride seu de iride et speculo*, Ed. Baur, Die philosophischen Werke des Robert Grosseteste, Beiträge zur Geschichte der Philosophie des Mittelalters, IX, Münster, i.W.; Aschendorff, 1912. p. 77:13-37)

iv また、グローステストは、本訳で紹介される『色について』において、人工的に造られる色を挙げている。実験室において、さまざまな純度の透明体とさまざまな量や強さの光を任意に得て、任意の色が人工的に得られる。(本訳Ⅵ)

2 Aristoteles『自然学』第3巻 第1章 201a «そして、^①これらの運動の各々は、それぞれ二面的な仕方で、その当の物事に属する、たとえば、^②これなる実体〔の生成・消滅〕では、一方はその型式、他方はその欠除態として、また性質〔の変化〕では、一方が白なら他方は黒、また量〔の増大・減少〕では一方が完全十分なら他方は不完全不十分、というように。» (出 隆・岩崎允胤訳『アリストテレス全集』3, 岩波書店 1968年発行)

Aristoteles『形而上学』第11巻 第9章 1065b11 «そして、これらの各々は、それぞれ二面的な仕方で、そのあらゆる基体に属する(たとえば、^③これと指し示される存在〔述語形態としての実体〕では、一方は型式として、他方はその欠除態として、また性質では、一方が白なら他方は黒、(中略)というように〔二面的な仕方で〕)。» (出 隆訳『アリストテレス全集』12 岩波書店 1968年発行)

— 1986年9月30日 —